# 杜甫における仙境と仙道への憧憬

下　定　雅　弘

## はじめに

杜甫は、生涯、唐王朝の朝臣であることを生きがいとした。左拾遺を務めた後は、漂泊の中でも、いつか朝臣に返り咲くことが悲願だった。だが、同時に杜甫は一貫して仙（後述する仙境と仙道の兩者を含む）[1]への憧憬を抱き佛（教）への傾倒を保持し續けた。

杜甫の詩における仙と佛とに關わる表現は、わかい頃に始まる。そしてそれは最晩年に至るまで、同時期に、また交互に、繰り返し表れる。[2]兩者はいずれも「兼濟」の對極、「獨善」[3]の中核を占めるものとして、杜甫の人生の選擇肢の中にあった。實際には、杜甫は、終世、朝臣でありたいとの願いをもって生き、仙あるいは佛を自分の生きる道とすることはほとんどなかった。しかし、兼濟の道が絶たれる時、それは具體的な行動となって現れ、杜甫の生活と精神にかなり重きをなすことがある。

小稿では杜詩に見える仙への憧憬に焦點を當て、その內實と生涯における軌跡とを辿りたい。

杜甫の仙を論じて、從來の研究で最もまとまったものは、郭沫若『李白與杜甫』[4]の「杜甫的宗教信仰」である。小稿は、杜甫と杜甫の文學の眞實を究明する立場から、郭沫若の研究の意義を評價し、さらに仔細に杜甫における仙の實際に迫ろうとするものである。

## 一　仙境への憧憬

杜甫の詩のうち、私の初歩的な調査によれば、仙に關わる表現の見えるものは五十五首、[5]佛のそれは三十一首に見える（兩者の重なるものがある）。

この仙に關わる表現を持つ詩は、大きく、仙境への憧憬か、仙道への希求かの二類のいずれかに分けることができる。[6]後述するように、仙といっても、その性格と役割がこ

のように截然としているのは、杜甫の仙表現の大きな特徴の一つである。

## 一の一　仙境への憧憬

仙境への憧憬とは、仙境を訪ねたい、あるいは仙境に住みたいとの願望である。こうした願望を表す詩は二九首を認める。語としては、「滄洲」への憧憬として表現されることが九例で最も多く、「桃源」への願望として表現されるのが八例⑦、「福地」への憧憬が二例。「崑崙」は多數登場するが、全て、詠じる對象が遙かな遠方にあることや、峻嚴・美しさといった性質を取って、將軍の活躍・建物の美しさ等を表現するものである。「崑崙」については小稿では扱わない。

仙境への憧憬は、ごくわかい時、李白と知り合う前からあった⑧。大曆元年（七六六）、五十五歳の秋、夔州で、少壯年時代を追懷しての五古「壯游」〇九五五⑨に「東のかた姑蘇臺に下るに、已に浮海の航を具う。今に到るも遺恨有るは、扶桑を窮むるを得ざりしことなり」という。開元十九年（七二一）、二十歳、吳越に遊んだ時、海上の仙山扶桑三島を訪ねようと船の準備までしたのに、實現しなかった。それを「遺恨」と言っている。なお、「扶桑」の語は後述の「滄洲」とほぼ同じく仙境の意で、「幽人」一四一八にも見える（後掲）。

以下、作詩時期の順に典型的な例を見る。

天寶十四載（七五五）、四十四歳、奉先縣での七古「奉先の劉少府の新たに畫きし山水の障の歌」〇一三〇に「聞く君は赤縣の圖を掃却し、興に乘じて滄洲の趣を遣畫すと」、聞けばあなたは奉先縣の圖を畫き、さらに興に乘じて憂さ晴らしに仙境の風情を屛風に畫いたとのこと、という。

「滄洲の趣」は、謝朓「宣城に之かんとして新林浦を出で板橋に向かう」（『文選』卷二七）に「既に祿を懷うの情を懽ばしめ、復た滄州の趣に協えり」、これまで俸祿を中央で思う存分俸祿を貪ってきたが、これからは、隱逸の地で自適の生活を樂しもう⑩、とあるのが初出。

「滄洲」は、廣く隱逸の地を指し、あるいは仙境を意味

し、その用法は詩人により詩により異同があるが、[11] 杜甫は、後の例にも見るようにほぼ仙境の意で用いている。[12]

杜甫の「滄洲」には三つの用法がある。一、この詩のように、繪畫の中の山などを滄洲に見立てる。他に、「玄武の禪師が屋壁に題す」〇五七二（後掲）、「故の著作郎貶臺州司戸滎陽の鄭公虔」〇九五〇がそうである。二、實際の山（王屋山など）を滄洲に見立てる。「憶昔行」一三一九がそうである（後掲）。三、自分が心身を落ち着ける究極の地。これが、最も多い。「曲江にて酒に對う」〇二〇九（後掲）、「江漲る」〇四六四（後掲）、「西閣二首」〇九七五（後掲）、「奉贈盧五丈參謀琚に贈り奉る」一四〇六（後掲）、「幽人」一四一八（後掲）がそうである。

乾元元年（七五八）春、長安での七律「曲江にて酒に對す」〇二〇九の後半四句にいう。「飲を縱（ほしいまま）にし久しく人の共に棄つるに任せ、朝するに懶く眞に世と相い違う。吏情更に覺ゆ滄洲の遠きを、老大徒らに傷む未だ衣を拂わざるを」。[13]

時に杜甫は左拾遺の任にあった。詩は、朝廷で何か問題があり、[14] 勤めに氣が進まないが、官に縛られている身を思えば仙境への憧憬を實現できないことが一層情けないと慨嘆している。仕途不如意の際に、杜甫の仙境への憧憬が頭をもたげることを見て取れる。

乾元二年（七五九）秋、秦州での五律「秦州雜詩二十首」其十四〔〇二九七〕にいう。「萬古仇池（きゅうち）の穴（けつ）、潛かに通ず小有天（しょうゆうてん）。神魚今見えず、福地語眞（しん）に傳う。近く接す西南の境、長（つね）に懷（おも）う十九泉。何れの時か一茅屋、老いを送らん白雲の邊に」。

二十首は、それぞれ秦州の景物の特徴と當時の不安定な生活を述べている。この詩は同谷にある「仇池」に至った時に詠じたもの。「仇池」は山の名。山上に仇池があるのでこの名になった。「小有天」は道家が傳える洞府の名。「仇池」が、仙境福地に通じているのだとの說が實際にあったのだろう。この詩はその證左となる。結句、長い旅の疲れで安住の地を求める思いが言わせている。「福地」は、もう一例、上掲「玄都壇の歌、元逸人」〇〇六二にも、元逸人が住まう仙境、自分はいたり得ない地として見えてい

る。

上元二年（七六一）春、五十歳、成都での五律「江漲る」〇四六四にいう。「江は蠻夷に發して漲り、山は雨雪を添えて流る。大聲は地を吹きて轉じ、高浪は天を蹴りて浮かぶ。魚鼈は人の得るところと爲り、蛟龍も自ら謀らず。輕帆好し去ること便なり、吾が道滄洲に付さん」。

杜甫は大雨が降って川の水が漲るのが大好きだった。漲る水の勢いが、杜甫に旺盛な活力を與え、滄州へ行きたいとの思いを高ぶらせている。

寶應元年（七六二）、五十一歳、梓州の玄武山での五律「玄武の禪師が屋壁に題す」〇五七二にいう。「何れの年にか顧虎頭、滿壁に滄洲を畫ける。赤日石林の氣、青天江海の流れ。錫飛びて常に鶴に近く、杯渡るも鷗を驚かさず。似たり廬山の路を得て、眞に惠遠に從いて遊ぶに」。

城の東の玄武山の頂上に玄武廟が有り、ここに顧愷之が描いた滄洲の仙境の畫があった。杜甫はこの廟壁に詩を書き付けた。詩には「滄洲」「錫」「鶴」「慧遠」等、仙界と佛敎兩面の語が混在して一つになっている。この詩では、杜甫の超俗の世界の伴侶として兩者は非常に近い。

廣德二年（七六四）冬、成都の李固の家での五律。「李固の請える司馬弟の山水圖を觀る三首」〇七九八～〇八〇〇は、これも題畫詩。成都の李固の家で、その弟が描いた山水畫を見て詠じた。其一では「群仙愁思あらず、冉冉として蓬壺に下る」と、仙人たちが何の愁いもなく蓬萊にゆったりと舞い降りているさまを描く。其の二の結句では「此の生萬物に隨う、何れの處にか塵雰を出でん」と、自分が萬物の轉變とともに移ろっていて俗塵を拔け出せないことを慨嘆している。其の三〔〇八〇〇〕の結びの二句にいう。「浮査竝びに坐し得て、仙老暫く相い將いたり」、畫中のいかだは竝んで坐れる餘裕がある、仙人の翁よ私を連れていっておくれ。「浮査」は傳說中の、海上と天の河との間を往來する槎。

永泰元年（七六五）春、杜甫はこの前の年の暮春、閬州から成都にもどり、嚴武の幕吏となっていた。節度參謀を辭して草堂に歸ってきている時の五律「春日江村五首」其一〔〇八〇八〕に「農務村村急なり、春流岸岸深し。乾坤

萬里の眼、時序百年の心。茅屋還た賦するに堪えたり、桃源自ら尋ぬ可し。艱難生理に昧く、飄泊如今に到れり」という。「乾坤」二句は、戰亂の世界と漂泊の身世を見つめての深い感慨である。頸聯、茅葺きの草堂は我が身を託するのに申し分なく、ここにいるだけで桃源郷のように心身ともに安らぐ世界を尋ねることができるという。一・二句の農民の暮らしと村の風景を受けて、浣花溪を桃源郷に見立てている。

「桃源」は五排「集賢院の崔于二學士に留贈し奉る」〇〇五九に「故山藥物多く、勝概桃源を憶う」、故山には藥草が多く、美しい景色は桃源郷を思わせる、とあるのが杜詩での初出。桃源（桃花源）の用法の源には、陶淵明「桃花源記」の村落の影像がある。桃源は、故郷のように心身ともに安らぐことができ（「赤谷西崦人家」〇三〇七、「不寐」〇九六四、「巫峽敝廬……」一一四九、「嶽麓山道林二寺行」一三九五）、花木美しく（「北征」〇一八八）、憂いのない所（「詠懷二首」其二〔一三九二〕）で、滄洲よりは身近である。

大曆元年（七六六）、夔州西閣での五排「西閣二首」。其一〔〇九七四〕は、夔州での假住まい「西閣」に長く留まることになってしまったのを嘆く。其二〔〇九七五〕は、いっそのこと東の海に行き、神仙の住む世界を求めたいとの願望を詠じる。「懶心江水に似て、日夜滄洲に向かう。道わず含香賤しと、其れ鑷白して休むを如せん。……豪華古往を看、服食して冥かに搜るに寄せん。詩は人間の興を盡くさば、兼ねて須く海に入りて求むべし」。

「含香」は尚書郎。漢代、天子の側近である尚書郎は、天子に奏上する時、鷄舌香（丁香という香木の實）を口に含んだことから。「鑷白」は、白髮を拔く。老年をいう。「鑷」は毛拔き。杜甫はこの時、檢校工部員外郎の官銜を有していた⑮。だが、北歸の願いはかなわず、就任は絕望的である。窮境を拔け出せず、老いが深まるほどに、杜甫の仙境と仙道への憧憬は強くなっていく。

大曆二年（七六七）、夔州で赤甲山の麓から瀼西へ轉居する時の五律「卜居」一〇八三にいう。「歸ること遼東の鶴を羨み、吟ずること楚の執珪に同じ。未だ碧海に游ぶを成さず、著處丹梯を覓む。雲嶂江北に寬なり、春耕瀼西

に破る。桃紅にして客若し至らば、定めて似ん昔人の迷いしに」、丁令威が鶴になって故郷の遼東に歸ったのを羨ましく思い、楚の宰相になっても故郷越のうたを歌った莊鳥と同じように故郷を思う。いまだに碧海に舟を浮かべて遊ぶことはかなわず、山のあちこちに住むところを探している。長江の北、雲にとどくほど高い山の麓に平らな土地が廣がる、その瀼西の地で春に土を耕そう。桃が赤くなるころ旅人が訪ねてくるなら、きっと後漢の劉晨と阮肇と同じように仙界に迷いこむだろう。

「丹梯」は仙界に昇るための丹い梯。轉じて高く險しい山。尾聯は、前の句の春の農耕を受けつつ、「桃花源記」の武陵の漁師が桃源郷に迷いこんだ話を意識している。

故郷に歸田したいとの思いと、仙境への憧憬とがないまぜになっている。北歸がますます實現困難になっていく狀況において、仙境を訪ねたい、そこに住みたいとの願いはますます切實である。

大曆四年（七六九）秋、荊南節度使衞伯玉の參謀盧琚に贈った五排「盧五丈參謀琚に贈り奉る」一四〇六の最後四句にいう。「流年蟋蟀に疲れ、體物幸いに鷦鷯なり。滄洲の願いに孤負すれば、誰か云わん晩に招かるると」、流れる年月の中で蟋蟀の聲は聞き飽き、幸いにも鷦鷯をまねて身の丈にあった生活をしています。仙境に行きたいとの願いにそむきますから、晩年になって朝廷で任用されたいと誰が申しましょう。

この二句は、李白「王昌齡と同じく族弟襄の桂陽に歸るを送る二首」其一に「紫宮の戀に躊躇し、滄洲の言に孤負す」、天子の居を慕う想いにとらわれ、滄洲に行くという平生の言葉に背いている、とあるのを逆轉している。北歸して員外郎に就任することが絶望的だから、仙境への憧憬を強調することで、悲哀を慰撫している。

大曆四年（七六九）秋、湖南での五古「幽人」一四一八にいう。「……往に惠詢が輩と、中年滄洲の期あり。天高くして消息無く、我れを棄つること忽ち遺るるが若し。內には懼る道流に非ずして、幽人に瑕疵とせられんことを。洪濤笑語を隱し、枻を鼓す蓬萊の池。崔嵬たる扶桑の日、照耀す珊瑚の枝。風帆翠蓋に倚り、暮れに東皇の衣を把る。

元和の津を嚥嗽せんとするも、思う所煙霞微かなり。名を知らるるは未だ稱するに足らず、局趣たり商山の芝。五湖復た浩蕩として、歳暮に餘悲有り」。

かつて滄洲に行くことを約束しあった友を思っての詩である。「幽人」は世外の仙人。「惠詢」は、仙人になったのではと、杜甫が思っている友人。「見瑕疵」は仙界に行った友人に、仙人になれない自分の缺點を發見されるの意。「往に惠詢が輩と」以下の六句は、かつて仙境滄州に行こうと約束していたが、その「幽人」たちに自分は見捨てられたのではと悲しみを覺え、それは多分、自分の道を求める態度に缺點があるのを見つけられたからではないかと、恐れている。

「洪濤……」以下の四句は、滄洲で友人たちが仙人となって戯れるさまを想像する。最後の六句にいう。津液を飲んで仙人になりたいのだが、友人たちは煙霞の彼方にいて居所が分からない。世間に名を知られたいと思うようでは褒めたものではない、商山の四皓のようになりたいがそれも無理だ。洞庭湖は果てしなく廣がり、年の暮れに悲しみは果てしない。

漂泊の窮境は極限に來ている。滄州を見つめる杜甫の思いは、俗を離脱しがたい自己とせめぎあって痛切である。

## 二　仙道への憧憬

杜甫の仙道への憧憬の主な目的は不老長壽にある。仙道への憧憬を表現した詩は二六首。具體的な表現は、「葛洪」と「丹砂」、または兩語が結合したものが多い。

天寶三載（七四四）、洛陽での五古「李白に贈る」〇〇一九にいう。「……豈に青精の飯の、我が顔色をして好からしむる無からんや。大藥に資の乏しきに苦しみ、山林跡は掃うが如し。李侯は金閨の彦、身を脱して幽討を事とす。亦た梁宋の遊有り、方に瑤草を拾うを期す」、顔をわかわかしくする青精飯なら、この世にないわけはない。菌丹を作る資金が乏しくて困っているし、仙藥の材料がある山林には久しく行っていないので、足跡は消えてしまったろう。李白殿は金馬門で天子に仕えていたお方だが、そこを脱け出て山奥の道士を訪ねようとしている。さらに私と一緒に

梁宋を旅しようとのこと、そこできっと仙草を手に入れよう。

「青精の飯」は、南天の枝葉を採って搗いた汁に米を浸し、蒸して乾燥したもの。服用すれば顔色を良くし壽命を増すという。「大藥」は金丹。不老不死の藥。「瑤草」は仙草。李白は高力士の讒言により朝廷から追放され、洛陽で杜甫と知り合った。その時に、李白に贈った詩。杜甫は仙藥を實際に作ろうとしていた。李白とともに仙草を探す旅に出る期待を述べている。

天寶四載（七四五）の秋、李白と兗州に遊んだ時の七絶「李白に贈る」〇〇二四にいう。「秋來たりて相い顧みれば尚お飄蓬、未だ丹砂に就かずして葛洪に愧ず。痛飲狂歌空しく日を渡る、飛揚跋扈誰が爲に雄なる」。前二句、李白と杜甫が二人ともまだ丹砂を煉ることができていないのを嘆き、葛洪に對して恥ずかしいと言っている。[16] 杜甫は李白とともに錬丹を達成することを約束していた。

天寶七載（七四八）、長安の近郊で河南尹の韋濟に送った五排「河南韋尹丈人に寄せ奉る」〇〇三三は、河南尹韋濟の才德を讃え、自己の漂泊生活の困苦を述べ、引き立てと援助を期待している。その後半にいう。「濁酒陶令を尋ね、丹砂葛洪を訪う。江湖短褐を漂わせ、霜雪飛蓬に滿つ。牢落乾坤大にして、周流道術空し。……戸鄉土室を餘す、誰か話らん祝雞翁」、私は陶淵明のように濁酒を求め、葛洪のように丹砂を探し求めています。粗末な服を着て世の中を放浪し、ぼさぼさの髪は雪や霜のように眞っ白です。廣大な天地の間で落ちぶれてしまい、さすらっている內に身につけた方術もさびついてしまいました。……穴倉のように粗末な留守宅を戸鄉に殘したままさすらっている、仙人の祝鷄翁のような私のことを話題にしてくださるのは貴方以外に誰がいましょう。

「戸鄉」は地名。偃師の西二十里にある。「祝雞翁」は仙人。洛陽の人で戸鄉北山のふもとに住んでいた。この數句は、杜甫自身のこの時の姿である。「道術空」というから、その程度は別として仙術を修練したことがある。この杜甫の形象はやや複雜で、自己を「牢落」の仙人になぞらえつつ、一方では自尊心を保ち、また一面では卑屈な媚び

を賣る色合いをも帶びている。[17]

上元元年（七六〇）春、成都草堂での五律「農と爲る」○三九六。「錦里煙塵の外、江村八九家。圓荷小葉浮かび、細麥輕花落つ。宅をトして茲れ從り老いん、農と爲りて國を去ること賒かなり。遠く勾漏の令に慚ず、丹砂を問うを得ざるを」。

「爲農」は「農民になる」の意。「勾漏」は、葛洪が勾漏（廣西省北流縣）に出る丹砂を目當てに、その地の縣令を志願した故事に基づく。[18]

首聯は成都の田園風景の美しさを描き、頸聯は一生農耕に從事して都を離れたままで老いていくだろう寂寞の情を述べる。尾聯、いまだに煉丹の術を獲得しておらず深く葛洪に恥じるという。

この詩が表現している感情も複雜である。まず成都にやってきて定住できた喜びを詠い、しかし後半では、農夫となって、都にもどり官に就くこと（兼濟）はできず、仙道への憧憬（獨善）も達成できていない遺憾の思いを述べる。安住の喜びと、兼濟と獨善、兩者のいずれをも達成できていない悲哀と、非喜こもごもの錯綜した感情がこの詩にはある。

上元二年（七六一）、成都での七古「丈人山」○四八二にいう。「青城の客と爲りし自り、青城の地に唾せず。丈人山を愛するが爲なり、丹梯は幽意に近し。丈人祠西に佳氣は濃し、雲に緣り住まんと擬す最高峰。白髮を掃除するには黃精在り、君看よ他時冰雪の容を」。結びの二句にいう、山の最高峰に白髮を除く藥草黃精が生えている、見よ私がいつか神人の白い肌を獲得するのを。

「丈人山」は青城山、成都西北約六十キロの青城縣にある。道教の聖地。黃帝がこの山を封じて五嶽丈人としたという傳說がありこう呼ばれる。「黃精」は多年生草木。道家はこれを食すれば不老長壽を得るとしていた。「氷雪」は神人の白い肌。『莊子』「逍遙遊」に「藐かなる姑射の山に、神人有り。肌膚は氷雪の若く、綽約として處子の若し」。

廣德元年（七六三）六月、梓州での五排「章留後侍御に陪して南樓に宴す」○六五一にいう。「屢〻食す將軍の第、

仍(しき)りに騎す御史の驄。本とより丹竈(たんそう)の術無し、那(なん)ぞ免れん白頭の翁たるを」。

章留後は章彝。その宴に陪席しての作。後の二句、自分の衰老を嘆き、丹竈の術を心得ていないので白髪になっても仕方がないという。「丹竈」は丹薬を煉る竈。「丹竈術」への崇信があったから、この言葉がある。

廣德二年（七六四）、閬州から成都草堂に歸った時の作「王二十四侍御契に贈る四十韻」〇七四五にいう。「錦里丹竈を殘し、花溪釣綸(ちょうりん)を得たり」、草堂には丹砂を煉る竈が殘っており、浣花溪で釣り絲を垂れることができる。杜甫は成都で、丹砂を煉っていた。

同じく廣德二年、成都にもどって後の五排「司馬山人十二に寄す十二韻」〇七五二にいう。「道術曾て意を留め、先生早(つと)に蒙を擊つ。……永く作(な)る殊方の客、殘(こぼ)たれては生く一老翁。相い哀れみて骨換う可くんば、亦た清風に馭せしめよ」。

「司馬山人」は道士、事跡は不明。長安でかつて出會い、杜甫は仙術の敎えを受けた。その恩師に成都に歸った時に出會ったのである。「骨を換う」は、仙藥を飲んで自分の骨を仙骨に換えること。「清風に馭す」は昇仙すること。詩は二人の交游を述べ、山人の道術を讃えている。杜甫は自らの衰老漂泊を嘆き、山人に仙術を指敎してほしいと賴んでいる。

大曆元年（七六六）秋、夔州での五排「漢中王の手札を奉ず、韋侍御蕭尊師が亡ずるを報ず」〇九五七にいう。「秋日蕭韋(しょういい)逝けりと、淮王(わいおう)峽中に報ず。少年杜史(ちゅうし)を疑い、多術仙公を怪しむ」。

漢中王からの手紙で舊友の韋侍御・蕭尊師が亡くなったのを知り、感慨を詠じた詩。「少年」は韋侍御が年わかいことを指し、「杜史」は杜下史。侍御史の古稱。周の杜下史を務めた老子は百六十餘歲とも二百餘歲ともいわれる長壽だった。「多術」は蕭尊師が仙術に長じていること。「仙公」は、仙人になった蕭史。「疑」「怪」の主語は杜甫。

杜甫は、二人は仙道を身につけた人だったのに早く死んでしまったのが信じられないと言う。杜甫は、長生養老の道術、仙道を信じていた。

大暦二年（七六七）初秋、夔州での五排、峽州（湖北省宜昌市）の長官劉伯華に寄せた詩「劉峽州伯華使君に寄す四十韻」一一五六にいう。「妊女新裹を縈り、丹砂舊秤に冷ややかなり。但だ椿壽の永きを求むるのみ、杞天の崩るるを慮る莫し」、水銀が新しい袋につめられ、いらなくなった丹薬は古い秤の上で忘れられて冷たくなる。私は椿の大木のように長生きしたい、杞の國の人が天の崩れ落ちるのを心配したように、天下を心配する身分ではない。

「妊女」は、水銀の隠語。不老長壽の仙薬の主材料。「椿壽」は、長壽。上古に八千年を春とし、八千年を秋とする木「大椿」があったという（『莊子』逍遙遊）。

杜甫は肺病と消渇の病を、成都で得ていたが、大暦元年には落馬して、不自由だった脚がさらに悪くなり（「醉爲馬墜諸公攜酒相看」一〇六一）、大暦二年には、肺病の症狀が進んでいる（「又上後園山脚」一一三二）。病が重くなればなるほどに、仙道への憧憬はますます強くなる。

大暦二年秋、夔州での五古「昔遊」一二四七にいう。「昔華蓋君に謁せんと、深く洞宮の脚を求む。玉棺已に天に上り、白日亦た寂寞たり。……東蒙舊隱に赴き、尚お同志の樂しみを憶う。伏して事う董先生、今に於いて獨り蕭索たり。胡爲ぞ關塞に客たりて、道意久しく衰薄する。妻子亦た何人ぞ、丹砂前諾に負く。髮鬢の變ずるを悲しむと雖も、未だ筋力の弱きを憂えず。藜を杖つきて淸秋を望み、興有らば廬霍に入らん」。

「華蓋君」は、周の仙人、華蓋山で修道し昇仙したとされる王子喬。ここは王子喬のように優れた道士の意。「玉棺」は、王子喬がその中に寢て昇仙したという天から下された棺。詩の後半「東蒙」は蒙山。山東省に在り、東海に面しているので「東蒙」という。「董先生」は董奉先、董煉師と呼ばれていた。彼は當時東蒙山で修練し、天寶年間には九華丹法を衡陽で修め、朱陵後洞に住んでいた。「廬霍」は道敎の聖地、廬山と衡山。

杜甫は天寶三載（七四四）梁宋・齊魯に遊び、王屋山に入って、華蓋君に就いて仙道を我が物にしようとしたが、すでに亡くなっていて願いが遂げられず、董煉師に師事した。そのいきさつと、修道が續かず我が物になっていない

無念の思いを詠じている。そして遠くない將來再び廬山・衡山を訪れたいとの期待を述べている。杜甫の仙道への思いは、去年から今年へと、日ごとに強まっている。

## 三　南征と仙道

この章では杜甫の人生の最後における南征と仙道の關係を確認する。「南征」は「北歸」に對立する語。北歸は長安に歸る、また故**鄉**洛陽にもどること。南征は、杜甫自身の用法によれば二つの意味を持つ。一、成都を離れて後の湖南諸地の漂泊、二、大曆四年、潭州から衡陽に南下したこと。ここでいう「南征」は後者[19]。

「はじめに」で述べたように、杜甫は、わかい頃から、仙への憧憬あるいは佛への傾倒を、繰り返し、交互に表明してきた。晩年、夔州にある時もそれは變わらない。

杜甫は、大曆元年（七六六）の作「西閣二首」其二〔〇九七五〕に「懶心江水に似て、日夜滄洲に向かう」と、仙境への強い憧憬を述べていた。（上掲）。だが翌大曆二年（七六七）の五排「秋日夔府に懷いを詠じ、鄭監・李賓客に寄せ奉る一百韻」一一五五では、最後の一段に、佛教の悟りを開きたいとの思いを熱く述べる。「……本自迦葉に依る、何ぞ曾て偓佺に藉らん。……晩に聞きて妙教多く、卒に踐みて前愆を塞がん。……勇猛を心の極と爲し、清羸もて體の孱きに任す。金篦もて空しく眼を刮るも、鏡象未だ銓を離れず」。

詩は友人である鄭申と李之芳に寄せたもの。當時、鄭・李二人は、鄭は江陵に、李は夷陵にいた。全詩の重點は漂泊の困苦への感慨を述べることにあり、最後に佛教に歸依したいとの思いを激しく表明している。「迦葉」は釋迦の第一の弟子摩訶迦葉波。「偓佺」は古の傳說中の仙人[20]。「妙教」はすぐれた教え。「前愆」は以前の罪過。「勇猛」は勇猛心、佛法を求める強い心。「大勇猛を發す」と、多數の經典に見える[21]。「清羸」は瘦せて弱った身體。「金篦」は眼の治療に用いたへら。煩惱を拂いのけることの比喩[22]。

大意はこうである。私はもともと釋迦の弟子の迦葉を慕っている、どうして仙人の偓佺を賴むことがあろうか。……老年になって佛法のありがたさがわかった、教えを守

って過去の罪の責めをふさぎたい。……佛典に「佛法を求める勇猛心を奮い起こせ」とある、痩せた身體も氣にしない。金のへらで眼の膜を剝がして眞實を見きわめようとしても、鏡の中の虚像を本物だと見間違えているようではだめだ。

杜甫の佛教に歸依する決意は固く、きっぱりと仙道を否定している。しかし、この後、杜甫はまるでこうした發言を忘れたかのようである。「昔遊」一二四七（上掲）と「憶昔行」一三一九（後掲）では、昔華蓋君に會えなかったことへの遺憾の思いと再び董煉師を訪ねて仙道を學びたいとの願望を表現している。「秋日夔府……」が強く仙道を否定するのは、實際上却って仙・佛の杜甫への影響が、兩者相い讓らずの關係であったことの現れだろう。

その後、大曆四年（七六九）まで、仙・佛への尊崇と憧憬の表現は交互に出現する。しかし、佛教への傾倒は「嶽麓山道林二寺行」一三九五（大曆三年）を最後の一首として、シーソーゲームのような兩者への憧憬は終わりを告げる。以後、杜甫の思いは、死に臨む時までもっぱら仙道に傾注される。郭沫若が「杜甫的精神面貌、在他辭世前的幾年、特別傾向於佛教信仰」[23]というのは事實ではない。[24]

仙道への希求が切實さを增していることが南征を決行した不可缺の原因である。

大曆三年（七六八）、出峽后の作「憶昔行」一三一九にいう。「憶う昔北のかた小有洞を尋ね、洪河の怒濤に輕舸過ぐ。辛勤するも華蓋君を見ず、艮岑青く輝くも慘として么麽たり。……巾拂の香は餘す藥を搗くの塵、階徐の灰は死す丹を燒くの火。玄圃滄洲は莽として空闊たり、金節羽衣は飄として婀娜たり。……徒然として咨嗟して遺跡を撫し、今に至りて夢想するも仍お猶を左うがごとし。祕訣隱文は內教を須う、晩歲何の功もて願いをして果たさしめん。更に衡陽の董錬師を討ね、南のかた浮かびて早く瀟湘の舵を鼓せん」。

大意はこうである。思えば昔、王屋山中にある小有洞を尋ねようと、黄河の怒濤を小舟で渡った。苦勞してたどりついたが華蓋君には會えず、綠に輝く峯はあっても主なき山は光を失っていた。……道士の遺品である頭巾と拂子に

は仙藥を搗いた時の香がまだ殘り、階段には丹藥を燒いた火が冷え切っていた。玄圃や滄洲に喩えるべき王屋山は果てしなく廣く、金の符節や羽毛の衣がひらひらと搖れていた。……あてもなくため息をつきつつ道士が丹藥を煉った遺跡を慕ったが、今に至るも煉丹の夢は實現していない。道術の祕傳にはその要諦が傳授されているのだが、老いた私はどんな功德を積んでこの宿願を果たせばよいのか。そうだ、衡陽におられる董鍊師を訪ねよう、南のかた瀟水や湘水に舟を浮かべていますぐにも舵を動かすのだ。

王嗣奭《杜臆》（卷一〇）は、この詩についていう。「公羈旅に困しむ、故に此の憶い有り。亦た以て舟を瀟湘に泛かぶ、而して董鍊師衡陽に在り、便に乘じて之れを訪ねんと欲す、因りて華蓋君を追憶するなり。然れども詞筆は玄超、眞に仙靈の氣を帶ぶ」。詩は全篇が仙道を追求する切實な心情に滿ちている。衡陽に行って董煉師に仙道を學びたいとの願いは、大歷二年（七六七）、夔州にある時すでに持っていた（上掲「昔遊」一二四七）が、ここに到って衡陽に南下しようとの思いはますます強くなっている。

大曆四年（七六九）春、潭州より舟で衡陽に行く途中の五古「詠懷二首」其二〔一三九二〕の後半にいう。「多憂もて桃源を汚し、拙計もて銅柱に泥む。……葛洪及び許靖、世を避くるは常に此の路なり。賢愚誠に等差あれば、自ら合に馳騖を受くべし。羸瘠且つ如何せん、魄は鍼灸の屢〻なるに奪わる。……南のかた祝融の客と爲り、勉強して杖屨に親しまん。老人星に結託し、羅浮に衰歩を展べん」。

「桃源」は湖南の武陵溪にあったとされる。「銅柱」は衡陽にある、ここは借りて衡陽を指す。「許靖」は三國時期蜀の人、曾て孫策の難を避けて交州に赴いた。「此の路」は杜甫の南征の旅路。「賢愚」、「賢」は葛洪と許靖、「愚」は杜甫。「祝融」は衡山の峰の名、董煉師が煉丹している地。「老人星」は、龍骨座のアルファ星カノープス。長壽を掌る星㉕。「羅浮」は山名、廣東博羅縣內に在り、道教の聖地。東晉の咸豐年間（三二六－三三四）、葛洪は此の山で修道し煉丹を行った。

大意はこうである。自分には憂いが多すぎるので行けば

平和な桃源を汚してしまう、生計のためにも衡州に行くことにした。……葛洪と許靖とが世を避けた時もこの道を通ったのだ。自分と彼らとは當然その賢愚を異にする、愚かな私は世の亂を避けて翻弄される運命を甘受するしかない。痩せ衰え、何度も針灸の治療を受けて精氣もなくなった。……衡陽についたら祝融峰を訪ね、董煉師のご尊顔を拜したい。もしも老人星のご加護を得ることができて長壽を得るならば、さらに羅浮山にまで足を伸ばしそこに住まうことにしよう。

衡山に行き、董煉師について煉丹の術を會得することは、この時最終的に決まった。戰亂と疾病のために、北歸の望みがなくなった時（兼濟の志は達成されない）、杜甫は、自らの人生の最後に殘された時間を仙道への熱望の實現（獨善の願いの實現）に賭けたのである。

南征の今一つの理由は、生活を支援してくれる人を求めたことである。大曆四年（七六九）夏、衡州到着時の作「韋大夫之晉を哭す」一三九八にいう。「丈人禮數を叨くし、文律早に周旋す。……南に過れば倉卒に駭き、北に思えば悄として聯綿たり」、あなたからはありがたいことに過分の禮節を蒙り、早い時期から詩文について語り合いました。……南の衡州に來て突然の訃報に驚き、あなたの任地である北の潭州を思えば悲しみは盡きません。

杜甫は韋之晉を生活の支援者として頼って衡州に行った。だが彼が衡州に着いた時、韋之晉はすでに衡州刺史から潭州刺史に轉任しており、まもなく潭州で病沒する。杜甫は衡州に到着してこの知らせを受け、沈痛な哀悼の思いを表明したのである。

衡山で董煉師について仙道を學びたいという願いと、生活の支援者を得ること、[26]この二つが結びついて、杜甫を南方に向かわせた。衡陽に着いた後、杜甫は韋之晉を頼ることはできず、衡山にも行くことはできず（生きることに必死でそれどころではなかったのだろう）、潭州にもどるしかなかった。大曆五年（七七〇）夏、湖南兵馬使臧玠が潭州で叛亂すると、戰火を逃れるために、杜甫は再び衡州に行く。彼は衡州から耒水を遡って郴州に行き、刺史の崔偉を頼るつもりだった。しかし洪水に遭い、衡州にもどらざるを得

なかった。しばらくして潭州の戰火が收まったことを知り、六月潭州にもどる。同年秋潭州を離れ、漢陽を經て襄陽に到り、漢水を遡って長安へ歸ることを目指すのだが、途中、冬、潭州と岳州との間で、船中に客死する。[27]

杜甫が最後に仙道に示した思いは以下の如し。

大曆五年（七七〇）、潭州での作「重表姪王砅評事の南海に使いするを送る」一四三〇の終わりにいう。「我れ丹砂に就かんと欲し、跋涉身の勞るるを覺ゆ。安んぞ能く糞土に陷らん、志の鯨鼇に乘らんとする有り。或いは鸞を驂として天に騰り、聊か鶴の鳴皋を作さん」、私は葛洪のように丹砂を採りに行き、嶺南に留まりたい。もう山河を歩き回るのに疲れた。なんでこの汚らわしい土地に落ちこんだままでいよう、鯨とウミガメに乘って海に出るのだ。あるいは鸞に乘って天に翔けあがろう、そこで君への送別に鶴の鳴き聲をあげるのだ。

大曆五年冬、湘江の船上での五排「風疾にて舟中枕に伏し懷いを書す三十六韻、湖南の親友に奉呈す」一四五七の最後にいう。「葛洪、尸は定めて解せん、許靖力は任え難し。家事と丹砂の訣、成ること無くして涕は霖を作す」、葛洪は尸解してきっと仙界に行ったのだろう、許靖が轉々としたような旅は耐えがたい。家庭の諸事も仙藥を煉ることも、全てがうまくいかず涙は長雨のようにいつまでも流れ落ちる」。[28] これが絶筆である。[29]

## まとめに代えて

郭沫若『李白與杜甫』「杜甫的宗教信仰」に、杜甫の道教信仰について論じた最後にいう。「可以看出杜甫從年輕時分一直到他臨終、都在憧憬葛洪、王喬、討尋丹砂、靈芝、想騎白鶴、跨鯨鰲、訪勾漏、游仙島」。郭沫若の言う通りである。

私は、これに、杜甫の仙に關わる表現の特徴として、以下の四つのことを加えたい。

一、杜甫の仙への憧憬は、大きく二つに分かれる。仙境への憧憬と、仙道への希求である。前者は仙境滄洲に行きたいとの思いであり、後者は丹藥の服用により不老長生を達成したいとの希求である。

二、杜甫の仙に關わる表現は、自己の憧憬の表白として、端的明瞭である。杜甫の詩における仙の表現の大部分（七割程度）は自らの仙への思いを端的に表している。上には、その主な例を擧げた。

比較の對象として、孟浩然と李白を擧げよう。

孟浩然は、仙に關わる表現の數量では、杜甫よりも相當多い。だが、孟浩然は自己自身の希求として、仙への憧憬をあまり表現しない。彼が自らの求仙の思いを表した詩は一〇首に滿たない。[30] 孟浩然の仙表現は、天臺山や故鄉襄陽を、また友の住まいを仙境に見立てる作がめだつ。[31] そして山水や佛教等、他の要素と融合する表現が多い。

李白の仙表現が豐潤・華麗で、躍動感に滿ちるのに比べると、杜甫のそれは自己の憧憬・希求を、端的明瞭に示して地味な感じさえする。

三、杜甫の仙への憧憬は一貫している。杜甫も「鐵鎖高く垂れて攀ず可からず、身を福地に致すこと何ぞ蕭爽たる」（「玄都壇の歌、元逸人に寄す」〇〇六二）と、自分は仙界によじ登れないということがある。だが、これは、元逸人を讃える文脈の中の一句である。「更に肯えて紅顏にして羽翼を生ぜんや、便ち應に黄髪もて漁樵に老ゆべし」（「玉臺觀二首」其一〔〇七二〇〕）、私が紅顏にもどって仙人の羽が生えるようなことがおこるわけがないと、慨嘆することがある。だが、これも、仙の華麗と、漁師や樵夫とともに生きていく寂寞を對比して、後者の生き方の哀切を強調する句である。上に見たように、杜甫の仙境への憧憬と、仙道への希求は、わかい時から最晩年にいたるまで、極めて率直に表明され、變わることがない。

李白は仙人となり仙界に身を落ち着けることを人生の目標の一つとして生きた。だがその李白の仙についての表現に、かえって波があり、時として仙への深い懷疑を表明している。[32] 李白は、人生の多大の時間、修道の實踐と現實の中に生きていたから、仙人になることの困難にそれだけぶつかっていたからだろう。

その上で思う。杜甫がこれだけ、仙境への憧憬と仙道への希求を一貫させたのは、それが、漂泊の悲哀を癒やし、前進して行く上で、どれほど大きな役割、強い力を持って

いたのかを證するものだと。

四、杜甫の仙への憧憬は晩年になるほどに強まる。上にそのことを見た。北歸の不可能と絶望の度合いが増し、老いと病が進むほどに、仙境への憧憬と仙道への希求は強まっている。

杜甫は、兼濟への強い志を抱き、その志がかなわない窮境の中でも、獨善すなわち自己に快適をもたらすありとあらゆる喜び—家族と共にある喜び、友と語らい游ぶ喜び、食べる喜び、飲酒の喜び、繪畫を鑑賞する喜び、山水と景勝に親しむ喜び、詩を詠じる喜び等々—を大切にし、それを詩に表現し續けた。[33]

仙境と仙道の「存在」、そしてこれへの憧憬と希求は、あまたある「獨善」の喜びの中でも、生き方そのものに關わって、杜甫の人生を支える最も重要な役割をはたし續けたのである。

**註**

① 小稿では、「道」の語を用いない。「道」はその包含する內容が廣すぎて、杜甫の仙に關わる表現にそぐわないからである。

② 拙文「杜甫の詩の魅力　七」「三　兼濟と對立し續けた願望—東遊と仙道・佛敎」「三—二　佛敎と仙道への關心」（「葦牙 Journal」一三一、二〇一七・八）に概要を論じた。

③ この「獨善」は、白居易の「獨善」の概念。私的な時空での快適を意味する。杜甫は、「獨善」を概念としては確立していなかったが、その內實を十二分に表現世界に具備している。拙文「杜甫の詩の魅力—その內容と形式」（『杜甫全詩譯注』二、講談社學術文庫、二〇一六・七）「內容について」を參照。

④ 人民文學出版社、一九七一・一一。郭沫若に次いで、杜甫の求仙をかなり全面的に、あるいは多面的に論じているものとして以下の二篇がある。曾亞蘭「杜甫晚年神仙思想及個性追求」（「貴州社會科學」一九九〇年第二期、總第八六期、三六—四二頁）、李乃龍「論杜甫對道敎的態度」（「廣西師範大學學報（哲學社會科學版）」第四十卷第二期、二〇〇四・四。四六—五〇頁）。

⑤ 郭沫若『李白與杜甫』「杜甫的宗敎信仰」には「求仙」の例を一七擧げる。實際には杜甫が仙に對する關心を示す詩（語や表現に仙への關心を認められるもの）は五〇首を超える。郭沫若は、杜甫が道敎を信仰したことの一證として「三大禮賦」を擧げていう、「《三大禮賦》到底是怎樣的性質呢？都是十足地歌頌道敎的東西、今天讀起來、實在令人難受」。

この作品は玄元大皇帝を贊え揚げるもの。その目的は玄宗の愛好に取り入って、求仕を成功させることにある。これは杜甫の兼濟に屬するもので、求仙の精神とは特に關係がない。「三大禮賦」及びこれと關わる二首「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」〇〇三八・「奉留贈集賢院崔于二學士」〇〇五九は、杜甫の獨善の一としての仙には關わりがないので拙文では論じない。

⑥　付表Ⅰを參照。仙に關わる表現を持つ詩の大部分は、はっきりと仙境・仙道のいずれかに關心を示している。ただし、仙境に區分した作の中に、「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」〇〇二九、「玄都壇歌寄元逸人」〇〇六二、「幽人」一四一八のように仙道的要素をも持つものがあり、仙道に區分した作の中に、「太平寺泉眼」〇三一一「丈人山」〇四八二のように仙境的要素を含むものもある。これらは、いずれの比重が重いかを見て區分した。

⑦　「卜居」一〇八三の「桃紅……」の結句を入れるなら九例。後述。

⑧　郭沫若前掲書「杜甫的宗教信仰」（一八一頁）に指摘する。

⑨　下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩譯注』に定める作品番號。杜甫の詩の引用は本書に據る。

⑩　解釋は、岡本不二明「滄洲と滄浪―隱者のすみかー」（「中國文史論叢」）四三頁、に依る。

⑪　岡本同上論文。

⑫　李白の「滄洲」一三例（一部後掲）は、ほとんどが仙境の意である。杜甫はそれを受け繼いでいる。

⑬　「吏情更に覺ゆ滄洲の遠きを、老大徒らに傷む未だ衣を拂わざる」の二句は、李白「玉眞公主別館苦雨贈衛尉張卿二首」其二に「功成らば衣を拂って去り、搖曳せん滄洲の傍に」というのをアレンジしている。

⑭　この年の三月、賈至が左遷され、六月、房琯・嚴武が左遷され、彼らの人脈の中にいた杜甫も華州の司功參軍に貶される。

⑮　官員としての杜甫のこの時の狀況については、『杜甫全詩譯注』「用語說明」「杜甫の官歷」「檢校工部員外郎」を參照。

⑯　解釋は、吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注』二（二〇一三・一一）に「全首四句、李白についていい、みずからも似た境涯なのを、言外に托したとして、釋する」（三〇一頁）というのに從う。李乃龍上掲論文に「李白對金丹道的名家葛洪和葛洪煉丹的羅浮的敬仰深深感染了杜甫」（四八頁）という。

⑰　李白「宣城の趙太守悅に贈る」に「自ら笑う東郭の履、側に慙ず狐白の溫。閑吟竹石に步し、精義朝昏を忘る。憔悴醜士となり、風雲何ぞ論ずるに足らん」という。これは趙太守に引き立てを求めるもので、自分の窮狀を訴えるのに、仙術に耽っていることを述べ、それを「憔悴」「醜士」の語で受けている。杜甫のこの詩が仙道に耽る自らを強調するのも、

李白のこの詩と同じ意圖だろう。

⑱『晉書』卷七二「葛洪傳」。

⑲ 拙文「杜甫における獨善―最晚年の「南征」をめぐって―」（『中國文史論叢』一〇、二〇一四・三）一四頁を參照。

⑳『史記』卷一一七「司馬相如列傳」に「偓佺の倫（ともがら）、南榮に暴（ばく）す」。索隱に、「韋昭曰く、古の仙人、姓は偓」。劉向『列仙傳』卷上に「偓佺なる者は槐山の採藥の父なり」。「上林賦」（『文選』卷八）に「偓佺の倫（ともがら）、南榮に暴（ばく）す（偓佺らは南側の軒先で日を浴びている）」。

㉑『般若波羅蜜多經卷』卷二五（『大正新修大藏經』八、六七五頁b二八行）、『楞嚴經』卷一（同上一九、一〇八頁c二四）等。

㉒ 北涼・曇無讖譯『大般涅槃經』「如來性品」卷八（『大正新修大藏經』一二、四一一頁c二一）、宋・慧嚴等依泥洹經加之『大般涅槃經』卷八（同上一二、六五二頁c五）他。

㉓ 郭沫若前揭書一九五頁。

㉔ 付表2に最晚年の仙・佛に關わる表現の狀況を示す。

㉕「南極老人」ともいい（『史記』卷二七「天官書」）、「壽星」ともいう（同卷二八「封禪書」）。

㉖ 南征の理由として、從來はほとんど生活の必要ばかりが指摘されていた。南征を生活の必要のためとする說は以下の通り。馮至『杜甫傳』（人民文學出版社、一九五二）「悲劇的結局」に「他到衡州、本來想投奔在郇瑕時彼此相識、如今任衡州刺史的韋之晉」（一三四頁）。聞一多「少陵先生年譜會箋」（『唐詩雜論』、一九五六）大曆四年の條に「按公至湖南、必欲依韋之晉」。朱東潤（一九八一）は、生活方面で賴るべき友として、南方にいる韋迢・魏司直・崔韋を擧げるが、韋之晉の名は擧げていない（一九四頁）。陳貽焮『杜甫評傳』下卷（上海古籍出版社、一九八八）第二十章「蕭蕭夕霽」四「回雁峰前的歌哭」に「前面解〝拙計泥銅柱〟句、說老杜來衡、爲謀生計。那麼、此行的具體目的究竟何在？聞一多說是〝欲依韋之晉〟」（一二七二頁）。莫礪鋒『杜甫評傳』（南京大學出版社、一九九三・一〇）第二章「六、夔府孤城：對人生與歷史的深沈思考」に「杜甫本想去投奔任衡州刺史的友人韋之晉、可是當他到衡州時、韋已調任到潭州刺史、杜甫在衡州舉目無親、只得折回潭州、沒想到韋已病卒」（一九四頁）。

朱東潤は、戰亂を避けるために友を求めたこととともに、仙道への希求を擧げるが、董煉師のことには觸れない。その『杜甫敘論』（一九八一）第十章「此曲哀悲何時終」に、「他又多少次想北上襄漢、但是那條路走不通、剩下的是向南、南方有他的親友、是避禍的好地方。不僅如此、他總不會忘去勾漏采藥的葛洪。還有蘇耽呢、那是後漢末年郴州的仙人、到現在還留下他的橘井、怎能不引起詩人的向往！」（一九六頁）。「蘇耽」のことは「入衡州」一四四五に見える。

曾亞蘭上揭論文は、「憶昔行」を擧げて「……轉念及華蓋弟子董煉師尙在衡陽朱陵後洞修煉、又稍感安慰、決定乘舟浮

訪之」（三八頁）といい、仙道を學ぶために南征を決定したことを明確に指摘する。

㉗ 王士菁『杜甫詞典』（河南大學出版社、二〇一一）「杜甫年譜簡編」二五七頁に據る。杜甫の終焉の地については、後藤秋正「杜甫の終焉の地と墓」（『杜甫全詩譯注』三「コラム2」、六三五～六三八頁）が諸學說を整理する。

㉘ この四句について李乃龍前揭論文にいう。「〝尸解〟而說〝定〟可見尸解之說是既然是相信又有所懷疑。這從他爲自己煉丹不成而淚落如雨可以看出。同時也可以從中體悟到杜甫對服食金丹不死理論的承認以及一位垂死者對生命深深的眷戀」。

㉙ 杜甫の最後の詩は「聶耒陽以僕阻水書致酒肉療飢荒江詩得代懷興盡本韻至縣呈聶令陸路去方田驛四十里舟行一日時屬江漲泊於方田」一四五一だという說も有力。この詩に基づき、耒陽で縣令から酒肉を差し入れてもらい、食べ過ぎて死んだとされる。『杜臆』は「過洞庭湖」一四五三を絕筆とするが、後藤秋正「杜甫詩の眞僞―「過洞庭湖」詩札記」（「中國文化」七六、二〇一八・六）に據れば、詩語は中唐以後の詩に見える用例が多く、宋詩に至って頻出する語が多いので、杜甫の詩とは考えがたいという。

㉚ 「山中逢道士雲公」、「越中逢天臺太一子」、「將適天臺留別臨安李主簿」、「武陵泛舟」、「尋天臺山作」、「寄天臺道士」、「送元公之鄂渚尋觀主張驂鸞」（詩題は四部叢刊諸州『孟浩然集』に依る）に止まる。



㉛ 天臺山を仙境に見立てるのは、「宿天臺桐柏觀」、「將適天臺留別臨安李主簿」、「寄天臺道士」他。襄陽を仙境に見立てるのは、「與王昌齡宴黃十二」、「與黃侍御北津泛舟」他。友の住まいを仙境に見立てるのは、「送王七尉松滋得陽臺雲」、「遊精思題觀主山房」、「清明日宴梅道士房」他。

㉜ 文では、開元二十二年の作「暮春江夏送張祖監丞之東都序」が、早くも修行のかいなく仙人になれないことを慨嘆する。詩では、「對酒行」、「同友人舟行遊臺越作」、「郢門秋懷」、「江上秋懷」、「覽鏡書懷」（詩題は『全唐詩』に依る）他。

なお『李白與杜甫』は「李白的道教迷信及其覺醒」において、「下途歸石門舊居」を擧げ、李白は終に道教の迷信から覺醒したとしてこういう。「他前往當塗的橫望山去向舊友吳筠道士訣別、也是他和道教迷信的最後訣別」（九四頁）、「〝如今了然識所在〟、是這首詩的核心句子、表明李白是覺悟了、要和一切迷信幻想脫離了。但他說得很娓婉、不是那麼金剛怒目」（九七頁）。だが、この解釋は無理だと思う。李白は仙人になれないことを悲嘆し、その可能性を強く疑いはしたが、終生、仙道への希求から離脫はしなかった。

㉝ 拙文「杜甫の詩の魅力―その內容と形式」（『杜甫全詩譯注』二）は、この考えに基づいて執筆した。

追記：小稿は、二〇一八年七月二八日開催「京都大學中國文學會」での發表草稿を基礎にし、調査と考察を加えて成ったもの

である。當日、興膳宏先生から貴重なご指教をいただきました。記して深く感謝申し上げます。

附表1

杜甫の仙に關わる表現が見える詩について、小稿の基礎資料として用意した。
・番號は、『杜甫全詩譯注』（講談社學術文庫）に用いるもの。
・仙境と仙道に類別した。
・兩者に關わる數首（注6に記す）については、重點を判斷していずれかに區分している。
・「自身」の欄は、自らの憧憬・希求を表明する作に、○または◎を付してある。◎は小稿で擧例している詩である。

【仙境】

| 番號 | 詩題 | 年號 | 西暦 | 地 | 自身 |
|---|---|---|---|---|---|
| ○○一四 | 臨邑舍弟書至苦雨黄河泛溢…… | 開元29？ | 七四一 | ？ | |
| ○○二九 | 送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白 | 天寶5 | 七四六 | 長安 | |
| ○○三一 | 贈特進汝陽王二十二韻 | 天寶5 | 七四六 | 長安 | |
| ○○六二 | 玄都壇歌寄元逸人 | 天寶11 | 七五二 | 長安 | |
| ○一一五 | 橋陵詩三十韻因呈縣內諸官 | 天寶13 | 七五四 | 長安 | |
| ○一三○ | 奉先劉少府新畫山水障歌 | 天寶14 | 七五五 | 奉先縣 | ◎ |
| ○二○九 | 曲江對酒 | 至德3 | 七五八 | 長安 | ◎ |
| ○二三○ | 望岳 | 乾元2 | 七五九 | ↓華州 | ○ |
| ○二九七 | 秦州雜詩二十首其十四 | 乾元2 | 七五九 | 秦州 | ◎ |
| ○三○七 | 赤谷西崦人家 | 乾元2 | 七五九 | 秦州 | ○ |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ○四六四 | 江漲 | 上元2 | 七六一 | 成都 | ◎ |
| ○四八一 | 野望因過常少仙 | 上元2 | 七六一 | 成都 | |
| ○五三九 | 謝嚴中丞送青城山道士乳酒一瓶 | 寶應1 | 七六二 | 成都 | |
| ○五七二 | 題玄武禪師屋壁 | 寶應1 | 七六二 | 梓州 | ◎ |
| ○五八七 | 冬到金華山觀因得故拾遺陳公學堂遺跡 | 寶應1 | 七六二 | 梓州 | |
| ○七一七 | 遊子 | 廣德2 | 七六四 | 閬州 | ○ |
| ○七二一 | 玉臺觀二首其二 | 廣德2 | 七六四 | 梓州→閬州 | |
| ○七九八 | 觀李固請司馬弟山水圖三首其一 | 廣德2 | 七六四 | 成都 | ○ |
| ○七九九 | 觀李固請司馬弟山水圖三首其二 | 廣德2 | 七六四 | 成都 | ○ |
| ○八〇〇 | 觀李固請司馬弟山水圖三首其三 | 廣德2 | 七六四 | 成都 | ◎ |
| ○八〇八 | 春日江村五首其一 | 永泰1 | 七六五 | 成都 | ◎ |
| ○九五五 | 壯遊 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | ◎ |
| ○九六四 | 不寐 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | ○ |
| ○九七五 | 西閣二首其二 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | ◎ |
| 一〇八三 | 卜居 | 大曆2 | 七六七 | 夔州 | ◎ |
| 一三九四 | 望嶽 | 大曆4 | 七六九 | 衡州 | |
| 一四〇六 | 奉贈盧五丈參謀琚 | 大曆4 | 七六九 | 潭州 | ◎ |
| 一四一八 | 幽人 | 大曆5 | 七七〇 | 湖南 | ◎ |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一四五三 | 過洞庭湖 | 大曆5 | 七七〇 | 衡州→洞庭 | ○ |
| 【仙道】 | | | | | |
| ○○一九 | 贈李白 | 天寶3 | 七四四 | 洛陽 | ◎ |
| ○○二四 | 贈李白 | 天寶4 | 七四五 | | ◎ |
| ○○二七 | 冬日有懷李白 | 天寶4 | 七四五 | 洛陽 | ○ |
| ○○三三 | 奉寄河南韋尹丈人 | 天寶7 | 七四八 | 長安近郊 | ○ |
| ○○三六 | 飲中八仙歌 | 天寶 | 七四二－ | 長安、洛陽他 | |
| ○二六六 | 遣興三首其三 | 乾元2 | 七五九 | 秦州 | |
| ○三一一 | 太平寺泉眼 | 乾元2 | 七五九 | 秦州 | ○ |
| ○三四七 | 寄張十二山人彪三十韻 | 乾元2 | 七五九 | 秦州 | |
| ○三九六 | 爲農 | 上元1 | 七六〇 | 成都 | ◎ |
| ○四八二 | 丈人山 | 上元2 | 七六一 | 成都 | ◎ |
| ○五七一 | 送段功曹歸廣州 | 寶應1 | 七六二 | 梓州 | ○ |
| ○六五一 | 陪章留後侍御宴南樓 | 廣德1 | 七六三 | 梓州 | ◎ |
| ○七二〇 | 玉臺觀二首其一 | 廣德2 | 七六四 | 梓州→閬州 | ○ |
| ○七三五 | 將赴成都草堂途中有作先寄嚴鄭公五首其四 | 廣德2 | 七六四 | 閬州→成都 | ○ |
| ○七四五 | 贈王二十四侍御契四十韻 | 廣德2 | 七六四 | 成都 | ◎ |
| ○七五二 | 寄司馬山人十二韻 | 廣德2 | 七六四 | 成都 | ◎ |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ○九五七 | 奉漢中王手札報韋侍御蕭尊師亡 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | ◎ |
| 一〇五〇 | 覽鏡呈柏中丞 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | ○ |
| 一一五六 | 寄劉峽州伯華使君四十韻 | 大曆2 | 七六七 | 夔州 | ◎ |
| 一二四七 | 昔遊 | 大曆3 | 七六八 | 夔州 | ◎ |
| 一三一九 | 憶昔行 | 大曆3 | 七六八 | 出峽後 | ◎ |
| 一三九二 | 詠懷二首其二 | 大曆4 | 七六九 | 潭州→衡州 | ◎ |
| 一四三〇 | 送重表姪王砅評事使南海 | 大曆5 | 七七〇 | 潭州 | ◎ |
| 一四三四 | 奉送二十三舅錄事之攝郴州 | 大曆5 | 七七〇 | 湖南 | |
| 一四四五 | 入衡州 | 大曆5 | 七七〇 | 衡州 | ○ |
| 一四五七 | 風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南親友 | 大曆5 | 七七〇 | 洞庭？耒陽？ | ◎ |

附表2

・大曆元年（七六六）以後、最晩年の仙・佛に關わる表現を有する詩について、その重點がいずれにあるかを確かめるためにこの表を用意した。
・二六首中、仙に關わる表現は一九首に見え、佛に關わる表現は七首に見える。大曆四年の「奉贈盧五丈參謀」一四〇六以後、亡くなるまでの詩は、仙の表現に集中している。

| 番號 | 0詩題 | 時 | 西曆 | 地 | 仙・佛 |
|---|---|---|---|---|---|
| ○九五五 | 壯遊 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | 仙 |
| ○九五七 | 奉漢中王手札報韋侍御蕭尊師亡 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | 仙 |
| ○九六四 | 不寐 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | 仙 |
| ○九七五 | 西閣二首其二 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | 仙 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 一〇五〇 | 覽鏡呈柏中丞 | 大曆1 | 七六六 | 夔州 | 仙 |
| 一〇八三 | 卜居 | 大曆2 | 七六七 | 夔州 | 仙 |
| 一一五六 | 寄劉峽州伯華使君四十韻 | 大曆2 | 七六七 | 夔州 | 仙 |
| 一一四七 | 別李祕書始興寺所居 | 大曆2 | 七六七 | 夔州 | 佛 |
| 一一五五 | 秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻 | 大曆2 | 七六七 | 夔州 | 佛 |
| 一一五六 | 寄劉峽州伯華使君四十韻 | 大曆2 | 七六七 | 夔州 | 仙 |
| 一二四七 | 昔遊 | 大曆3 | 七六八 | 夔州 | 仙 |
| 一二五二 | 大覺高僧蘭若 | 大曆3－ | 七六七－ | 夔州 | 佛 |
| 一二五三 | 謁眞諦寺禪師 | 大曆3－ | 七六七－ | 夔州 | 佛 |
| 一二六四 | 寫懷二首其二 | 大曆2 | 七六七 | 夔州 | 佛 |
| 一三一九 | 憶昔行 | 大曆3 | 七六八 | 出峽後 | 仙 |
| 一三五二 | 留別公安太易沙門 | 大曆3 | 七六八 | 公安 | 佛 |
| 一三九二 | 詠懷二首其二 | 大曆4 | 七六九 | 潭州→衡州 | 仙 |
| 一三九四 | 望嶽 | 大曆4 | 七六九 | 衡州 | 仙 |
| 一三九五 | 嶽麓山道林二寺行 | 大曆4 | 七六九 | 潭州 | 佛 |
| 一四〇六 | 奉贈盧五丈參謀琚 | 大曆4 | 七六九 | 潭州 | 仙 |
| 一四一八 | 幽人 | 大曆5 | 七七〇 | 湖南 | 仙 |
| 一四三〇 | 送重表姪王砅評事使南海 | 大曆5 | 七七〇 | 潭州 | 仙 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一四三四 | 奉送二十三舅錄事之攝郴州 | 大曆5 | 七七〇 | 湖南 | 仙 |
| 一四四五 | 入衡州 | 大曆5 | 七七〇 | 衡州 | 仙 |
| 一四五三 | 過洞庭湖 | 大曆5 | 七七〇 | 衡州→? | 仙 |
| 一四五七 | 風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南親友 | 大曆5 | 七七〇 | 耒陽? | 仙 |